藏文如來藏經譯註

香川孝雄

序

如來藏經は漢字譯としては，佛陀跋陀羅譯（以下舊譯と略稱す）と，不空譯（以下新譯と略稱す）の二譯が現に傳えられている。大正藏經では僅かに四，五頁の一小經に過ぎないが，思想的には，佛教の根本問題たる佛性を說いて一切衆生に成佛の可能性を示し，そのことを理解し易くする爲に九喩を以つて說明している。恐らく如來藏なる言葉を用いた最初の經典であろう。この思想は，やがて涅槃經，不增不減經，勝鬘經，無上依經，入楞伽經等の經典を生み，又，佛性論，究竟一乘寶性論，大乘法界無差別論には，その中心問題として取り擧げられ，更には大乘起信論の眞如緣起說へと發展した契機をなすものと見ることが出來る。かかる意味において觀過することの出來ない經典と見られる。チベットにおいても飜譯がなされ，現に西藏大藏經の甘殊爾部に收められて居り，北京版では Shu 259b～274a, デルゲ版では Za 245b～259b にあるのが，それである。中國においては，この經典に對する註釋は知られていないのに反しチベットでは學匠 Bu-ston によつて，二部の註疏即ち De bshin gśegs paḥi sñiṅ poḥi bsdus don riṅ po che gser gyi sde mig (西藏撰述佛典目錄 No. 5180) と ʼin tu zab ciṅ brtag par dkaḥ ba de bshin gśegs paḥi sñiṅ po gsal shiṅ mdses par byed paḥi rgyan shes bya (Ibid. No. 5182) の二がある。更にその複註が Sgra-tshad-pa によつて作られて， De bshin gśegs paḥi sñiṅ po gsal shiṅ mdses bar byed paḥi rgyan gyi rgan mkhas paḥi yod ḥphrod ces bya ba (Ibid. No. 5240) と題され，合計三部が存することゝなる。

如來藏の譬喩一覽表

譬喩名 ＼ 經論名	如來藏經	佛性論	寶性論	無差別論	涅槃經	央掘摩羅經	大法鼓經	大薩遮尼乾子所說經	入楞伽經
未敷花內如來	○	○	○	○					
巖樹中淳蜜	○	○	○						
皮糠中糠糧	○	○	○						
不淨處眞金	○	○	○	○					
貧家珍寶	○	○	○		○				
菴羅果內實	○	○	○						
弊物中眞金像	○	○	○						○
貧女懷貴子	○	○	○						
模中眞金像	○	○	○					○	
滿月被蝕				○					
池水被濁				○					
金山被翳				○					
虛空被覆				○					
日未出				○					
世界未成				○					
雲無雨				○					
石中金								○	
木中火								○	
地下水							○	○	
乳中酪								○	
麻中油								○	
子中牙								○	
藏中寶								○	
孕中胎								○	
雲中日						}		○	
重雲中月						○	○		
瓶中燈焰						○	○		
膚翳覆眼							○		
掌中阿摩勒果						○			

今，チベット文如來藏經の和譯を試み，漢字譯兩本と比較する時，全體的に見て，不空譯に近いことが知られるが，全然同じではない。これら諸本の對照によつて，漢字譯のみでは理解し難い點が解明され，又，本經自體の成長の跡を窮うことが出來るであろうが，そのことは註において述べることにした。又思想内容や成立及び飜譯に關しては，佛教文化研究所より發刊の「漢藏三譯對照如來藏經」の中に藤堂恭俊氏による詳しい解題があるから省略することゝし，こゝでは唯，本經の中心たる如來藏の譬喩について，他の諸經論に出る譬喩との關係を表にして掲げるにとゞめたい。譯文は出來得る限り藏譯の原文に忠實である樣，心掛けたが，そのまゝでは日本語としては稚劣なばかりか意味の通じ難い場合がある。それを防ぐ爲，原文にない言葉を補うことゝし，その言葉は〔　　〕で示した。又譯語のみでは意味の不明瞭な時は，その意味するところを（　　）内に書き加えた。

尚，本論稿は昭和35年度，佛教文化研究所において，藤堂恭俊先生をチーフとし，水谷幸正，成田俊治，澤田謙照，近藤徹稱，梅辻昭音，加藤善淨，賀幡亮俊等各氏との共同研究たる如來藏經ゼミナールにおける成果の一部であることを附記する。

本　文　和　譯

インド語にて Ārya Tathāgata-garbha nāma mahāyāna sūtra

チベット語にて聖なる如來藏と名付くる大乘經

一切[1]の佛，菩薩に歸命す。

かくの如く我聞く。一時世尊は正覺を成じてより十年せる熱[2]時の際に，王舍城耆闍崛山における寶月講堂の旃檀の重閣に，百千の有學，無學なる聲聞の比丘に滿つる比丘の大衆〔と俱にましました。その〕多くは阿羅漢〔で〕諸漏[3]を盡し，煩惱なく，自在を得，心善解脫，慧善解脫して，全てを知れる者である。〔譬えば〕大龍が所作已に辨じ，重擔を捨棄し，己の目的を逮得し，諸々の現起せる有結を盡す〔如く〕正智によつて心善解說〔を得て〕一切の衆生は自在

の最勝の彼岸に到る。卽ち[4]具壽大迦葉，具壽優樓頻螺迦葉，具壽那提迦葉，具壽伽耶迦葉，具壽大迦旃延，具壽俱郗羅，具壽薄俱羅，具壽離波多，具壽須菩提，具壽滿慈子，具壽語自在，具壽舍利弗，具壽大目犍連，具壽憍陳如，具壽烏陀夷，具壽羅睺羅，具壽難陀，具壽鄔波難陀，具壽阿難陀，彼等百千に滿つる比丘達と俱に住して居られた。種々の佛國より來集せる六十恒河沙程の一切の菩薩摩訶薩達は亦，一生補處にして，大神通力と無所畏とを得て，已に百千俱胝那由他〔という〕多くの諸佛に承事し不退の法輪を轉じた。無量阿僧祇世界の衆生は，[5]名を聞くことにより，聊かも無上正等覺より退轉せず。卽ち，[6]菩薩摩訶薩たる法慧，師子慧，虎慧，義慧，寶慧，最勝慧，月光，寶月光，滿月光，大勇健，無量勇健，無邊勇健，三世勇健，不動勇健，大勢至，觀世音，香象，香悅，香悅吉祥，吉祥藏，日藏，幢相，大幢相，無垢幢，無邊寶杖，捨寶杖，無垢寶杖，歡喜王，常歡喜，寶手，虛空藏，山岳，須彌山，大須彌山，功德寶光，陀羅尼自在王，持地，除一切衆生病，歡喜意，憂悲意，無憂，發光，梅檀，轉女，無量雷音，起菩提，不空見，一切法自在，彌勒菩薩摩訶薩，文殊師利，彼等六十恒河沙の菩薩摩訶薩達とも亦俱であつた。又，無量の天，龍，夜叉，乾闥婆，阿修羅，迦樓羅，緊那羅，摩睺羅伽，人，非人とも俱であつた。そこにおいて世尊は百千の眷屬に圍繞せられ，尊敬せられて，[7]國王，大臣，長者，居士，官吏，町民，國民の人々に尊重せられ，尊敬せられ，供養せられた。

さて，世尊は食事の後に，旃檀藏の樓閣の中へ入り給うた。その時，佛力によつてかの旃檀藏の樓閣より百千萬億の蓮華の花を出し，大きさ車輪の如く，〔妙なる〕色を具し，百千萬億〔の花〕が滿開となつて，それらは上方の虛空に昇ることによつて一切を具する佛國土を覆い，恰かも寶幔の如く彌覆した。[8]各々の蓮華藏には如來身が結跏趺坐して住し，十方に光明を遍く放ち，それらの一切の蓮華は亦滿開となつた。〔ところが〕その時，佛威神力によつて，それらすべての蓮華の花辨が色褪せ，汚れ，惡臭がして萎れた狀態となり，厭惡すべきものとなつた。しかし乍ら蓮華藏の中の[9]如來身は結跏趺坐して住し，普く十方に光明を放ち，輝いている。如來身がこれら蓮華藏に住することにより，

一切を具する佛國土が莊嚴せられ，それが爲に佛國土は極めて美わしくなつた。そこでその時，一切の菩薩衆及び四部の眷屬も亦，驚嘆して歡喜した〔が〕世尊の神通の行爲を見ることにより疑念を起した。卽ち百千萬億の蓮華の花がかくの如く惡色にして莖も亦惡色となつて厭惡すべき又，悅ばしからざるものとなつている〔にも拘らず〕それら蓮華藏の中には亦，各々に如來身が結跏趺坐して住し，十方に光明を放つて輝いているその因は何であり緣は何であるかを疑う。

そこで一切を具する菩薩衆及び四部の眷屬は疑つたところに〔解答〕を求める相をなした。その時，かの栴檀藏樓閣の中において金剛慧菩薩摩訶薩と呼ばれる〔方が〕衆と俱に坐して居られた。

そこで世尊は金剛慧菩薩摩訶薩に告げて語り給うた。善男子よ，汝が〔疑問とする〕法の說示より始める。よつて如來應供正等覺に問うことを許す。そこで金剛慧菩薩摩訶薩は世尊に許されて，天，人，阿修羅を有する世間と，一切の菩薩と四部の眷屬等の疑問の惱みを明らかにせんが爲に世尊に次のことを申し上げた。世尊よ。この一切世界が惡色にして惡臭を放つ百千萬億の蓮華によつて覆われている〔にも拘らず〕それらの中に如來身が結跏趺坐して住し，十方に光明を普く放つ彼等如來身を見て百千萬億の有命者[10]は合掌して禮拜することの因は何であり，緣は何でありますか。

そこでその時，金剛慧菩薩は偈を以つて次の樣に申し上げた。

千萬の佛は不動にして
蓮華の中に住し給い
御身によつてかく神通變化をなされることを
我は未だ曾つて見ることなし。
數千の光明は光り輝いて
かの一切の佛國土を覆い
不可思議なる法を享受して
諸々の導師は間斷なく作業し

花辨や莖が厭惡すべく
惡色となれる蓮華の中に
彼等は寶の如くに住し
それら厭惡すべき狀態に神通變化す。
我は恒河沙程の佛を見奉るに
その神通が殊勝なるを見て
それが永く愛樂せられる神變は何の如くであるか。
かゝる神變は未だ曾つて見ることなし。
兩足尊によつて說かれんことを願う。
何の因，何の緣なるかを說かれんことを願う。
世間の爲に哀愍して說かれんことを願う。
一切有[11]身者の疑を除かれんことを願う。

そこで世尊は金剛慧菩薩摩訶薩等一切の菩薩衆に語り給うた。善男子よ。如來藏と呼ばれる方等經がある。それを說かんが爲に如來はかくの如き色[12]相を現ずるのである。それ故に善く聽いて意[13]に受持せよ。されば我は說く。

金剛慧菩薩摩訶薩と一切の菩薩衆はそこで世尊に「善哉」と言つた。世尊はその如く聞いて次の樣に說き給うた。

善男子よ。譬えば惡色にして惡臭を放ち，厭惡すべきで，悅ばしからざる樣な如來によつて變化せられたる蓮華にも，又妙なる色，善き色をした美しき蓮華のそれら胎の中にも，如來は結跏趺坐して住し，百千の光明を放ち給えるのを知つて，諸の天，人に敬禮して供養をなす如く，善男子達よ。如來應供正等覺[14]は自己の智と慧と如來眼で以つて衆生〔を見るに〕有命者は百千萬億の貪・瞋・癡・渴愛・無明の煩惱の殼の中にある。善男子よ。衆生は煩惱の殼の中にあつて，それらの中において，同じ智を具し，眼を具する多くの如來がましまして結跏趺坐して不動なることを見る。一切の煩惱によつて染汚せられたそれらの中において如來の法[15]性は不動であつて，一切の有[16]趣によつて染汚せられないことを見て，彼ら如來は我と同じであると言われる。善男子よ。如來の眼

はその樣に輝いていて，かの如來の眼によつて，一切衆生には如來藏ありと見られるのである。

[17] 善男子よ，譬えば天眼を持てる人が天眼によつてかくの如き惡色にして惡香なる蓮華の蕾を割らずにその中を見てその蓮華藏の中に如來が結跏趺坐して住することを知つて[18]如來身を見んと欲するが如く，かの如來身は清淨なるが故に蓮華の花辨が惡色にして惡臭を放ち，厭惡すべきであり，散つて壞れている如く〔であつても〕善男子よ，如來は亦，佛眼によつて一切衆生は如來藏なることを觀察して，彼等衆生の貪，瞋，癡，渴愛，無明の煩惱の殼を除遣せんが爲に法を說き，それを成就せる諸の如來は[19]眞實性に住するのである。善男子よ，それらが[20]諸法の法性〔のすがた〕であつて，[21]諸々の如來が〔世に〕出ずるも或は又，出でざるも，彼等衆生は常に如來藏を有するのである。

善男子よ。〔彼ら衆生は〕厭惡さるべき諸々の煩惱の殼に覆われるが故に，それら煩惱の殼を壞して如來智を淨めんが爲に，如來應供正等覺は菩薩の爲に法を說き，又，これをなすことによつて勝解せしむのである。そこにおいて菩薩摩訶薩は，これらの法を堅持して一切の煩惱，隨煩惱より解脫せる時，如來應供正等覺と呼ばれることを得て，又，一切の如來の事を作すのである。

そこでその時，世尊は偈を以つて次の如く說き給うた。

譬えば厭惡すべき蓮華あり
その花辨未だ開かざる時
[22]或人天眼によりて見るに
如來藏は染汚せられず
その花辨を開くに
中に佛身が見られる如し。
佛は隨煩惱によつて〔染汚〕せられず
それ世間に於いて正覺を成ずる〔爲なり〕
かくの如く，我は又一切有命者の
その中に住する諸佛の身〔を見る。〕

譬えば厭惡さるべき蓮花の殼の如く
百千億の煩惱に覆わるゝを見る。
我は又それらを開示せんが爲に
諸々の智者は常に法を說くなり。
彼等衆生は佛となるべしと
覺らんが爲には煩惱を淨むべし。
我が佛眼はかくの如く
彼等には佛身が住するなり〔と〕
彼等一切衆生を觀察して
それらを淨めんが爲に法を說くなり。

[23]復次に善男子よ。譬えば蜜房がかたまつて樹の枝に懸つていて，十萬の蜜蜂が〔これを〕護り，〔その中に〕蜂蜜が滿ちている時に，蜂蜜を欲する丈夫が，彼等蜜蜂を善巧方便によつて驅逐し，その蜂蜜によつて蜂蜜の用に用いる如くである。善男子よ，その樣に一切の衆生も亦，蜜房と同じであつて，その中において[24]佛性は百千萬億の煩惱，隨煩惱によつて覆われていることが，[25]如來智見によつて知られるのである。善男子よ。譬えば蜜房の中の蜂蜜は百千萬億の蜜蜂によつて覆われて居る〔にも拘らず〕或る智者によつて〔蜂蜜のあることが〕知られる如く，又，一切の衆生には佛性が百千萬億の煩惱，隨煩惱によつて覆われていることが，如來智見によつて知られるのである。善男子よ。そこで又，如來は善巧方便によつて蜜蜂を驅逐する如く，彼等衆生が煩惱，隨煩惱によつて染汚されることなく，害されることのない樣に彼等衆生の[26]貪（rāga）瞋（dveṣa）癡（moha）慢（māna）憍（mada）覆（mrakṣa）忿（krodha）恚（vyāpāda）嫉（īrsya）慳（mātsarya）等の諸々の煩惱，隨煩惱を驅逐せんとして，その如く法を說くのである。如來智見は淸淨なるにより，世間において如來事を作すのである。善男子よ。我が如來眼は淸淨なるにより，我は一切衆生をその樣に見るのである。

そこでその時，世尊は偈を以て次の樣に說き給うた。

譬えばそこに蜜房あるならば
〔蜂蜜は〕蜜蜂により覆われて藏さる。
蜂蜜を求むる人，それを見ることにより
彼は蜜蜂を驅逐するなり。
又，その如く，蜜房の如し。
〔我れ〕三有[27]の一切衆生〔を見るに〕
彼等は多くの煩惱を起せる〔にも拘らず〕
煩惱の中に如來の住するを見るなり。
我又，佛にして清淨なる爲
〔蜂を〕驅逐する如く煩惱を消除し
よつて煩惱を害うなり。
それが爲，諸法は方便にて說かれ
彼等は如來となりて
世間において常に〔如來の〕事をなし
蜜蜂の蜜房の器の如く
辨才を具足して法を說くものたらしめんが爲なり。

復次[28]に善男子よ。譬えば米，大麥，粟，諸々の殼物は，核を粃によつて遍ねく護られていて自らの粃より去らない間は美味なる飲食としての用をなさない。善男子よ。食べたり飲んだり等，飲食することを欲する男女は隨逐し，擊破して粃の殼や外の皮を除くが如くである。

善男子よ，その樣に如來も亦，如來眼によつて一切衆生の中に如來性，佛性，自然性[29]あつて，煩惱藏の皮によつて包まれて住するのを見る[30]。

善男子よ，そこで如來は又，煩惱藏の皮を除き，如來性を清淨にし，彼等衆生を一切煩惱藏の皮より解脫する如く，世間に如來應供正等覺と呼ばるべきものになると考えて諸々の衆生に法を說くのである。

そこでその時，世尊は偈を以て次の如く說き給うた。

譬えば種子或は稻殼

或は粟，或は大麥の如し，
それらは粃を有する限り
その限り用をなさず
それらを打破して粃を除かば
多くの種類の用に堪うなり
それらの核が粃を有さば
諸々の衆生に對して用をなさず
その如く一切衆生の佛地[31]が
諸々の煩惱により覆わるを我は見る故に
我は彼等を清淨に〔せんが爲〕
速かに菩提を得せしめんが爲に法を說くなり。
一切衆生における我と同じき法性は
百の煩惱により纏縛されてあるなり。
それは恰も一切を清淨にする如く
速かに勝者とならしめんが爲に法を說くなり。

[32]復次に善男子よ。譬えば或人が道を行つて腐爛し，惡臭によつてあまねく覆われた不淨處へ金の塊を落した時，糞尿の惡臭によつてあまねく覆われた。その不淨處を他の淸淨でない人が注意深く見ても〔眞金は〕現われない。そこでそれより十年，二十〔年〕，三十〔年〕，四十〔年〕，五十年，百年，千年の間，不淨なものによる壞せざる法となり，いかなる衆生をも利益することがない如くである。

善男子よ，そこで天は天眼を以つてかの金塊を見て，或人に「奇なることよ。汝が行くところに，大きな勝れた金の寶が腐爛し，不淨なものによつて汚されている。その〔不淨を〕拭い給え。そして金の用をなさしめよ。」〔と言つた。〕善男子よ。腐爛したそして不淨なものとは，それは種々なる煩惱の異名である。金塊と言われるそれは不壞法の異名である。天の天眼を有する者と言われるそれは如來應供正等覺の異名である。善男子よ，如來應供正等覺は又，一切衆生の中に不壞なる如來法性があることを〔見て〕腐爛せる泥の如き煩惱を

除かんが爲に，諸々の衆生に法を說くのである。

そこでその時，世尊は偈を以つて次の樣に說き給うた。

譬えば〔或る〕人が金塊を
不淨中に墮せる時
〔その金塊は〕そこで少なからざる間
そのまゝにて住し，且つ不壞の法なり。
天は天眼を以つてそれを見るに
淸淨なるが故に他の人に曰く。
それは勝れた大寶の金なり，
淸淨ならしむれば，それは所用に堪う〔と言う〕が如し。
かくの如く我は一切衆生も亦，
無始已來の煩惱により染汚さるを見て，
それら〔煩惱〕は客塵煩惱なるを知る。[33]
自性淸淨なるが故に方便を以つて法を說くなり。

[34]復次に善男子よ。譬えば或る貧人の家中の倉庫の下の地中に大寶藏があつて，〔それは〕金により倉一杯に滿たされ，人の高さの〔七〕倍の地に覆われた〔地〕下にある時，大寶藏は貧人に次の如く〔卽ち〕「奇なる哉，我は大寶藏であつて地に覆われて居る」と言わなければ，大寶藏は心の自性なるが故に衆生は〔知ら〕ない。貧人の家の主は乏しい心で思惟〔するから〕そのものゝ上を往來する〔にも拘らず〕地の下に大寶藏があることを聞かないし，知らないし，見もしない。善男子よ。一切衆生の執着の意で考えれば恰も，家の下における〔大寶藏の〕如く[35]力，[36]無所畏，[37]不共なる如來藏と一切佛法藏の大寶あることを彼等衆生は色，聲，香，味，觸に執着する故に，苦の輪廻に流轉して，法の大寶藏を聞かざる故に得ることもなく又，淸淨になる爲に精進することもない。善男子よ。それ故に如來は世に出でて，菩薩の中にかくの如きの大寶藏を開示するのである。そこで彼等は大法藏を信じて，掘るのである。それ故に世間において如來應供正等覺と呼ばれるのである。〔如來藏は〕大法藏の如くであるから，〔我

は〕諸々の衆生に未曾有の因の相と譬喩の因とを開示し，大寶藏の施主となり，無貪の辨才を具し，力と無所畏と多くの佛法藏に生〔ぜしめる〕のである。善男子よ。その樣に如來應供正等覺は又，最も淸淨なる如來眼によつて一切衆生をその如く〔卽ち〕如來智と力と無所畏と不共の佛法を藏して淸淨なりと見るが故に，諸々の菩薩達に法を說くのである。

そこでその時，世尊は偈を以つて次の樣に說き給うた。

譬えば貧人の家の下に
寶と金にて滿たされた寶藏あり
その時〔家人は〕動〔心〕も慢心もなし
その〔寶藏〕は我は汝のものなりとも言わず
その時に家の衆生は
貧しくある〔に拘らず〕知らず
又，誰によつても，そのことを語られず
〔しかも〕彼の貧人はその上にあり，
その如く我は佛眼により
彼ら一切衆生を〔見るに〕貧人の如し
彼らの中に大法藏あり
不動にして[38]善逝の體を見る
我はそれを見て菩薩に
「汝は我（如來）の智を藏して持し
貧人に非ずして世間の主たり，
無上の法寶藏に生ず」と說く
我が說くところにおいて勝解を生ず
彼ら衆生は皆寶藏あるなり。
若し勝解により自から精進すれば
彼等は速かに最勝の覺を得べし。

[39]復次に善男子よ。譬えば菴羅樹の果，或は[40]膽部果，或は多羅樹の果，或は[41]籐

の果が，外皮の殻の中に不壊法なる小さな芽の種子を有し，それを地に蒔くと樹の大王となる如くである。 善男子よ， 又〔我は〕その様に如來は世に住して，貪，瞋，癡，有，無明の煩惱の外皮の殻によつて纏縛せられていることを見る。そこで貪，瞋，癡，有，無明の煩惱の殻の中に藏せられてある如來の法性は[42]衆生〔性〕と名付けられるのである。そこで清涼となつた狀態，それが涅槃であつて，無明煩惱の殻を淨めることにより衆生界の大智の聚を獲得するのである。かの最勝なる衆生界の大智の聚は如來である。その如くに說く見を有する世間より見るが故に如來と言う想をなすのである。善男子よ。そこで如來によつてはその如くに見られるから諸々の菩薩摩訶薩に如來の智を覺らしめんが爲に，その義を顯現するのである。

そこでその時，世尊は偈を以つて次の様に說き給うた。

譬えば一切の籐の果は
中に籐の芽があり
多羅や膽部〔の果〕にも悉くあり。
中にある果を〔地に〕植えれば生育す。
恰かも法の勢力を引くが如し。
一切衆生は籐の種子の如し。
一切衆生の中に佛身ありと
無漏なる佛眼は最勝なるにより〔見ることを〕得。
かの不壊なる藏は衆生なりと語らる。
[43]無智の中に住するも亦慢心なく
三昧を得て住するが故に寂靜となりて
そこにおいて如何なる動揺もあることなし，
譬えば大なる幹が種子より生ずるが如く
彼ら衆生も正覺を成じ
見を有する世間の主となり
清淨とならしめんが爲に法を說くなり。

[44]復次に善男子よ。譬えば七寶によつて作られた如來の像が貧人の掌の中にあつて，かの貧人はその如來の像を持つて曠野の險道を通過しようとする時，他人に覺られず盜賊に盜まれない樣にする爲に穢い惡臭の一片の布で纏つて貧人は曠野の險道を往く中に過つて〔突然〕死んで放置された場合，寶によつて作られた如來の像は穢い布によつて纏れたまま路傍に迷つて在り，道行く人達は知らずに踏んで去り，穢く臭い一片の布であまねく包まれたそれは〔道行く人達〕より「風によつて逐われよ」と謗られる。曠野に住する天は天眼を以つて觀察して餘の或人に言つた。「ああ，丈夫よ。かの一片の布の中には寶によつて作られた如來の像がある。一切の世間によつて禮敬せらるべきであるから開きなさい」と敎えるのである。

善男子よ。その樣に如來は一切衆生が煩惱の束縛に纏われて恥ずべき狀態となつて，長い間流轉し，曠野の險路にあつて常に迷つているのを見る。善男子よ，乃至又畜生の生處へ趣くものと相應し，種々なる煩惱の束縛によつて纏われる衆生の中に我と同じ如來身が存在するのを見る。善男子よ，そこで如來は[45]如來智見〔を以つて〕隨煩惱を離れ，淸淨を得る如く，我の如くに一切世間に禮敬せられるものとなると考えて，煩惱の縛による所纏の狀態より解脫せしめんが爲に一切の菩薩に法を說くのである。

そこでその時，世尊は偈を以つて次の樣に說き給うた。

譬えば恥ずべきものにより
纏われたる[46]善逝の體は
寶により作られしも，布切れにより纏われ
業の中に流轉せり
天眼により見らるれば
かの天は他の人に言えり
そこには寶〔所成〕の如來〔像〕あり
一片の布切を速かに開くべし
我が天眼は是くの如し

それによりては彼ら一切衆生も亦
煩惱の束縛により纏われて苦しみ
人は輪廻の苦によりて常に惱まさるるを見る
我は煩惱所纏の中に
佛身が寂然としてあり
彼は不動にして不變であり
未だ解脱せざるを見る。
我は是くの如く見已りて諫むるに
最勝の覺に住する〔法を〕聽くべし。
衆生の法性は常に是くの如し。
そこ（煩惱藏）に覆弊されし佛が住せり
善逝は智によりて解きほごすが故に
一切の煩惱は靜まるなり
その時，彼は佛名を得て
諸天人は歡喜せり。

復次[47]に善男子よ。譬えば容貌が醜く，臭穢であり，恥ずべきであり，恐しい樣であり，可愛でなく畢舍支[48]の如き孤獨な女人があつて孤獨の家に住している。そこに住して疑いなく轉輪聖王となる衆生を懷妊して彼女の胎內に住している如く，彼女の胎內に住している衆生を，卽ち我の胎內に住している衆生を知らないのであり又，我の胎內に住しているか，住していないかと云うことも知らない。又，他方において彼〔女〕は貧しい心と憶病な，下劣な，小さい心を以つて考えて居り，容貌が醜く，惡臭なるが故に，孤獨な家に住して日々を過している如くである。

善男子よ。その樣に又一切衆生は孤獨であつて輪廻の苦に憂惱せられ有の生に依つて孤獨の家に住しているのである。そこで諸々の衆生には如來の種姓[49]があるのであつて，胎內にあることも亦一切衆生は知らないのである。善男子よ。そこで如來は衆生等に自分自身を欺かない樣にする爲に，善男子よ。汝は

自からに失望することなく，汝は精進し，堅固にせよ。そうすれば汝の中には如來が住してある〔が故に〕いつの日にか生ずることになり，汝は菩薩と云う類に入つて衆生と云う〔類〕には〔入ら〕ないのである。そこで又，佛と云う〔類〕に入つて菩薩と云う類に入らないと云われんが爲に法を說くのである。

そこでその時，世尊は偈を以つて汝の樣に說き給うた。

譬えば惡色であり，容貌醜き
愚かなる或は孤獨の女人あり
孤獨なる家に住せり。
或時，彼女は懷妊し
彼女の胎內には確かに
大轉輪聖王あり，
〔彼の王は〕諸寶〔を備えし〕聖者，
四洲の主たるべく，安樂に住せり。
女人は彼〔の王〕が是くの如く
胎に住するや，住せざるやを知らず
孤獨なる家に住して
貧しい心にて日々を送れるが如し。
是くの如く又我一切衆生を〔見るに〕
孤獨にありて苦の法に惱まされ
三界の小なる樂に住〔せるにも拘らず〕
胎內に法性の住せるを見る。
是くの如く見て〔我〕菩薩に
世間を利益せんが爲に住する
法性を一切衆生は知らずして
我は下卑なりとの想を起すなりと說く。
汝，精進し堅固たれ
されば我が身は久しく無碍なる勝者となるべし。[50]

その時，佛藏を得るが故に

百千億の衆生は解脫せるものとなるべし。

[51] 復次に善男子よ。譬えば蠟によつて馬の型，或は象の型，或は女人の型，或は男子の型を造つて泥の中へ隱し，燒いて〔その蠟を〕落し，〔更に〕金を燒いて溶液を〔その中へ〕滿して次第に冷した時，同體となつているそれらすべての物體は，外の泥は黑く惡色となるが內のものは金によつて成つている。そこで或る金師若しくは金師の弟子が冷えたものとなつている物體を見るが爲に次第に泥を金槌で壞すと，その刹那に內に金によつて造られた物體があり淸淨である如くである。

善男子よ。その樣に又，如來の眼によつてすべての衆生を觀ると泥の物體の如くである。外の煩惱，隨煩惱の殼の內の中空には，佛法による無漏智の寶があり，如來が輝いて住せられるのを見る。

善男子よ。そこで如來はその如く一切衆生を觀るに，菩薩の內に趣いて，その如き法門をあまねく宣說しておられるのである。そこで寂靜，淸凉となれる菩薩摩訶薩は寶の如來智を以つて〔一切衆生を〕淸淨ならしめんが爲に如來は法の[52]金剛槌で外の一切の煩惱を滅するのである。

善男子よ。金師と呼ばれる彼は如來の[53]增語である。善男子よ。如來應供正等覺は佛眼によつて一切衆生をその如く觀ることによつて，彼等を煩惱より解脫せしめ，佛智に安立せしめんが爲に法を說くのである。

そこでその時，世尊は偈を以つて次の樣に說き給うた。

譬えば物體は外を泥により隱され

內は中空にて空虛なり

寶が住して滿たさるること

〔[54]その數〕百千の多くとなるなり

金師，冷えたるを知りて

物體を隱せる泥を除かば

寶〔像〕が顯われ

清淨なる物體となれるが如し，
かくの如く，又，我れ一切衆生を〔觀るに〕
金の物體が泥により隱さるるが如し。
外なる皮は煩惱の殼なりて
內に佛智が存在するを觀る。
そこにおいて寂靜，淸凉となれる
彼等菩薩は
煩惱なき身を與えられ
法器を以つてかの〔煩惱〕を摧壞し
寶の物體を見れば淸淨なる如く
そこにおいて佛子は淸淨となれり
すべて[55]十力の身を具足し
かの世間において供養せらる
我れはすべての有命者をかくの如く觀る
かくの如く淸淨なる善逝となりて
淸淨なる善逝は覺りの道を說くなり。

そこで世尊は金剛慧菩薩に說き給うた。在家若しくは出家の善男子善女人にして，この如來藏の法門を受持，讀誦して智慧を得，經卷を書寫して他人にも亦廣く說き開示すれば多くの福を生ずるだろう。金剛慧よ。又あらゆる他の菩薩は，如來智を成ぜんが爲に精勤であり，或は各々の世界において一切の佛を供養せんが爲に神通を修習することにより，次の如き三昧に入定する。〔彼等は〕その三昧の威力によつて恒河の沙よりも多い百千俱胝那由他の佛國において，又恒河の沙よりも多い諸佛世尊，菩薩，聲聞衆と俱に住する各々の如來に樓閣〔を奉獻した〕時に安樂である。〔その樓閣は〕幅が〔一〕由旬，高さが十由旬で，すべて寶によつて造られて居り天の香を具え，種々なる花や花粉を播き散らし，一切の受用の具を成辨して，日々百千の五十恒河沙程も奉り，乃至全部で十萬劫もの間の是くの如き供養よりも，他の善男子，善女人に菩提心を發せし

めて，この如來藏の法門より一喩を身に持し，或は經典に依住する場合〔の方が勝れている〕。金剛慧よ。この〔樓閣等の供養による〕福業は前の〔如來藏經の受持，讀誦等による〕福業と比べれば，百分，千分，百千分，算數，譬喩にも及ばず鄔波尼殺曇分にもたえられない。

金剛慧よ。又或る菩薩は佛法を求めるが故に，佛世尊より各々の如來に至る迄，百千劫の間，百千の四十斛の曼陀羅華を播く時，金剛慧よ，比丘，比丘尼，優婆塞，優婆夷は「菩提心を發してこの如來藏の法門を聞いて掌を合せて，隨喜した」と言う語を語つた。金剛慧よ，その最上の花や曼を具足する福業や善業は如來の安立し給う前の福業や善業と比べれば，百分，千分，百千分，算數，譬喩も及ばず，又鄔波尼殺曇分にもたえられない。

そこでその時，世尊は偈を以つて次の樣に說き給うた。

菩提に生ぜんと求むる
各々の衆生は，この經典を聽聞し受持し
書寫し安立して
恭敬の一偈を說く
この如來藏〔經〕を聞くが故に
若し勝れた菩提を求むるならば
いくらかの福聚を生ずべし，
そこにおいてその功德が聞かる
勝れた神通力に住し
勇者の淸淨なること千劫に及び
十方に人中の尊として
聲聞衆に恭敬さる
譬えば〔その數〕千恒河沙より多く
それ故，無上の不可思議なり
妙なる寶所成の樓閣を
各々の世間の師に奉る

それらの高さ十由旬
幅は一由旬なり
塗香と燒香にて供養され
そこには寶所成の座が設けられ
絹の敷物が百も敷かれて
他の床や椅子にも亦〔しかなり。〕
〔其の數〕譬えば恒伽の流の如く無量にて
一〔一〕の佛に供養す。
あらゆる世界に住する佛は
譬えば恒河沙より多し
彼ら佛に是くの如く奉献し
悉く敬つて供養するよりも
或る智者，この經を聞きて
一喩を受持して
或人に說かば
彼はそれ故に多くの福聚〔を得〕
〔それに比すれば〕勇者の得るかの福聚は
分や喩では及ばず
一切の有命者の所依にして
彼は速かに最勝の覺を成ず〔べし。〕
如來藏相應〔の法〕は
一切衆生の法性なり
若し智ある菩薩が恩惟すれば
彼は速かに菩提を成ずべし。

金剛慧よ。この教によつても亦，是くの如き法門が〔說かれる〕如く，菩薩摩訶薩に一切を知る智を成ずるものとなることに努力すべきことを知らしむべきである。金剛慧よ，昔，過去の時，甚だ無量なる，不可思議，不可比，不可說

なる無數劫の彼方，更に彼方の時に，如來，應供，正等覺，明行足，善逝，世間解，調御丈夫，無上士，天人師，佛世尊は「常に光明を放つ」と稱する世間に生じた。金剛慧よ，何故にかの如來は常放光明と名付けられるのかと言えば，金剛慧よ，世尊如來は常に光明を放つからで，菩薩の時に人の胎に入るや直ちにその人の胎內に坐し乍ら身より光を生じて東方の百千世界，十の佛國の微塵等を遍く照らしたのである。かくの如く，南，西，北，東南，南西，西北，北東，下，上方と十方の百千世界と十佛國土の微塵まで遍く照らし，そしてかの菩薩の身の光明は歡喜を生じ，淸淨であり，甚深の歡喜を作し，歡喜を生ずることによつて百千の世界を遍く照らすのである。

金剛慧よ。胎內に住する菩薩の光に觸れるそれ等百千世界の衆生は，すべて威德を具え，色[56]を具え，念[57]を具え，智慧を具え，領悟を具え，辨才を具えるものとなる。それら百千の世界において，地獄，傍生，閻摩羅界，阿修羅の中に生じている一切の衆生は，かの菩薩の光に觸れて自己の趣より死して天，人の中に生ずる。〔そして〕彼等は光に觸れて無上正等覺より退轉せざるものとなるだろう。又かの光に觸れて不退轉〔を得た菩薩は光に〕觸れるや直ちに彼等すべては無生法忍を得るだろう。〔そして〕五百功德品[58]と名付くる陀羅尼を得る。母の胎に住するかの菩薩の身の光に觸れた百千世界の一切は，琉璃によつて造られ，金の繩によつて美くしく畫かれ，又，寶樹は花と果と香と色とを具えて現われるだろう。それら寶樹は風に搖られて快い妙なる佛聲，法聲，僧聲，菩薩聲，菩薩の力と根と覺支と解脫と等持[59]と等至[60]の聲を生ずる。かの寶樹の聲によつて又，それら一切の百千世界における衆生は歡喜[61]と最大の歡喜とを得て住するのである。それら一切の佛國における衆生は，又，地獄，傍生，閻魔羅，阿修羅の境を離れるだろう。胎內に住するかの菩薩は，又彼等一切の衆生を月の曼陀羅の樣に照すだろう。胎に住するものが晝に三度，夜に三度，合掌して光を放つのである。

金剛慧よ。是くの如く菩薩は生じて覺を證得するまで，かの菩薩の身より常に光を放つだろう。證得して後は又この佛の身より常に光を放つだろう。この

樣にして般涅槃の時に至るまで，かの世尊の身より常に光を放つだろう。如來が般涅槃して後，舍利塔に住する時も亦，常に身の光を生ずるだろう。金剛慧よ，それ故にかの世尊は「常放光明」と天，人によつて號し呼ばれるのである。

金剛慧よ。又，世尊常放光明如來應供正等覺が初めて正覺を現じた時に，無量光と稱する千人の眷屬を持つた一人の菩薩があつた。金剛慧よ。無量光菩薩はその時，世尊常放光明如來應供正等覺にこの如來藏の法門を問うた。そこで世尊常放光明如來應供正等覺は彼等菩薩達に執持し，攝取せしめんが爲に，五百大劫〔の間〕一座に坐すが如く（座を立たずに）如來藏の法門を宣說し，そこで如來藏の法門の句を知らしめる爲に法を了別し，眞實の句と百千の譬喩によつて，彼等菩薩達に正しく宣說して十方の各十佛國土の微塵の塵程の世界にも亦，小功力を以つて悟らしめたのである。その時，この如來藏の法門乃至如來藏と言う名を聞いた一切の菩薩達[62]は四人の菩薩摩訶薩を除いて漸次，善根を成熟してかくの如く功德に莊嚴された無上正等覺を證得したのである。この世尊の敎において未だ無上正等覺を證得しない四菩薩とは誰であるのか。卽ち文殊師利，大勢至，觀世音と汝金剛慧の四菩薩である。金剛慧よ，その樣にこの如來藏の法門を聞くことによつて，菩薩摩訶薩は佛智を成ずる大利益があるのである。

その時，世尊は偈を以つて次の如くに說き給うた。

過去の時，無量劫において
常放光明と稱さるる世尊あり
その身よりかくの如き光明生じ
百千の國土を照らす
初めて佛智を證得せる〔時〕
無量光菩薩は
その時，かの善逝〔法〕王に問えり
この經は常に宣說せり

かの佛の教によりこの經典を
導師より聞くべし
彼は皆悉く速かに最勝の菩提を獲得せり。
〔但し〕四菩薩を除く。
大勢至及び觀世音
第三に文殊師利菩薩〔となし〕
第四は汝，金剛慧なり。
その時，彼等はこの經を聞けり。
無量光菩薩は
その時〔法〕王に請問を發せり
[63]その時，汝，金剛慧こそは
かの自在者たる善逝の子なり
我は又，前の行を行ぜし時
師子王たる善逝の名號を
[64]恭敬して聞く故に合掌し
この經典の名を聞けり
我は善き行爲の業により
速かに最勝の菩提を獲得せり。
それ故に，諸々の智者たる菩薩達により
常にこの最勝なる經典が受持せらるなり。

[65]金剛慧よ。業の障礙により纏縛せられている善男子，善女人は，この如來藏の法門を聞いて受持，讀誦，開示し，或は又，この法門を聞いて受持，讀誦，開示，書寫〔經卷〕することにより，少しの努力によつて，これらの法も現前し，又，業の障礙も除かれるのである。

その時，阿難陀は世尊に次の樣に問うた。

「世尊よ。業の障礙に纏縛せられずに，この法門に精勤する善男子，善女人は，如何程多くの佛，世尊の說法を聞いて出現したのでありますか。」 世尊は

答え給うた。「阿難陀よ。百佛による說法を受持して現われた善男子，善女人もある。阿難陀よ。二百，三百，四百，五百，千，二千，三千，四千，五千，六千，七千，八千，九千，一萬の佛，十萬の佛より乃至百千億の佛によつて說かれた法を受持して現われた善男子，善女人も亦在る。阿難陀よ。この法門を受持，讀誦し，他に廣く開示し，經典を書寫して受持する菩薩は定んで我は今，無上正等覺を獲得せりとの如き念を生ずるだろう。〔その時〕彼は，如實に知見し人，天，阿修羅の世間において恭敬せられ，又，供養せられるべきである。」

そこでその時，世尊は偈を以つて次の樣に說き給うた。

菩薩はこの經典を聞いて
我は最勝の菩提を得たりと思惟す。
若し人ありて，手にこの經典を得れば
彼はその如く世間に恭敬せられ
彼こそ世間の主たり，導師[66]たり。
導き，よく導いて稱讚さるべきなり，
若し人あつて，手にこの經典を得れば
彼はその如く法王と呼ばる
若し人あつて，手にこの經典を得れば
最勝なる人は法の燈を持し
彼は日月の如く見らるべく
世間の尊の如く恭敬されて住す。

世尊がこの樣に說き已られて金剛慧菩薩及び一切の菩薩衆，大聲聞衆，四衆の〔眷屬〕又，天，人，阿修羅，乾闥婆の世間は歡喜して世尊の所說を讚嘆した。

聖如來藏と名付くる大乘經，訖る。

インドの規範師 Çākya-prabha と大校修譯僧 Ye-çes-sde が飜譯し閱し Skad-gsar-chad が再び校訂して刊定した。

註

① 漢字譯兩本共歸敬偈を欠く。
② 舊譯には熱時の語なし。
③ 會座にある比丘衆が阿羅漢を得ているという説明は舊譯にはない。
經典の序分には，かゝる叙述は多く，中には唯除阿難と第一結集の故事にならつたものもある。例えば
「唯除阿難」を含むもの—小品般若經，大品般若經，光讚經，阿閦佛國經，大集經賢護分，大寶積經不動如來會，同經無垢施菩薩應辨會，得無垢女經，寶雲經，佛説寶雨經等
「唯除阿難」を含まないもの—放光般若經，妙法蓮華經，正法華經，拔陂菩薩經，無上依經，大法鼓經，佛説離垢施女經，大乘顯識經，度一切諸佛境界智嚴經，大方等無想經，父子合集經，大寶積經菩薩見實會等。
④ 比丘衆の一々の名前について舊譯は擧げず，新譯は，T譯と全く一致して19人の名を出している。
⑤ 舊譯は聞其名聞者とあるが新譯は稱名者とある。明らかに新譯者不空の作意によるものと思われる。この樣に漢字譯佛典に出ている稱名は注意すべきである。かゝる例は，寶月童子所問經にもある。卽ち
羅什譯，其有稱名者，卽得不退轉。
施護譯，所有如來名號，其人聞已恭敬受持。（中略）於無上正等正覺速得不退。
Tib 譯，de dag gi mtshan thos na bla na med pa yaṅ dag par rdsogs paḥi byaṅ chub las phyir mi ldog par rgyur ro /（月輪本 p. 42）
彼の名號を聞くならば，阿耨多羅三藐三菩提より退轉しないであろう。
上の對照によつて知る如く，稱名と譯したのは羅什だけである。羅什は，稱名不退說を說く十住毘婆沙論を譯しているところより稱名の支持者であつたと考えられる。更に進んで十住毘婆沙論に說く稱名說は果して龍樹自身の主張であつたのであろうか。譯者羅什の思想が加味せられているのではないか。根本的な再檢討を要する。そのことについては，「稱名の語について」と題して，第七回淨土敎學大會にて愚見を發表した。少くとも如來藏經には稱名思想はあらわれていない。
⑥ 菩薩の名に諸譯相異あり。よつて對照表を作れば次の如くである。
（次頁表參照）
⑦ 國王以下の眷屬の種類は舊譯に欠く。
⑧ pad maḥi sniṅ po, skt. padma-garbha
蓮華開敷の譬は凡らく華嚴の理念より來ているものであろう。しかし更に Mahābhārata の天地開闢說にまで遡ることが出來る。又，蓮華の中に人あり結跏趺坐して光明を放つことは雜寶藏經（大4. 529 b）にもあり，卽ち，「劫盡燒時一切皆空。衆生福德困緣力故十方風至。風風相次能持大水。水上有一千頭人二千手足名爲違細。是人臍中生千葉金色蓮華，其光大明如萬日俱照。華中有人結加趺坐。此人復有無量光明。名爲梵天王。」とあり，同じ樣な說は放光般若經第一，大智度論第八等にも出ている。
⑨ 舊譯は化佛とし新譯は如來とす。
⑩ Srog chags 及び後に出て來る Srogs chags su gyur pa は共に梵語 prāṇaka, jīva の譯で舊譯では衆生，新譯では有情として sems can(skt. sattva)と同じ樣に譯して

舊譯（49人）	新譯（46人）	チベット譯（50人）その譯
法慧	法慧	chos Kyi blo gros（法慧）
師子慧	師子慧	seṅ geḥi blo gros（師子慧）
金剛慧	虎慧	stag gi blo gros（虎慧）
金剛藏（元，明版のみにあり）		
調慧	義慧	don gyi blo gros（義慧）
		rin po cheḥi blo gros（寶慧）
妙慧	勝慧	rab mchog blo gros（最勝慧）
月光	月光	zla ḥod（月光）
寶月	寶月光	rin chen zla ḥod（寶月光）
滿月	滿月光	zla ba ña baḥi ḥod（滿月光）
勇猛	大勇健	rnam par gnon pa chen po（大勇健）
無量勇	無量勇健	rnam par gnon pa dpag med（無量勇健）
無邊勇	無邊勇健	rnam par gnon pa mthaḥ yas pa（無邊勇健）
超三界	三世勇健	ḥjig rten gsum rnam par gnon pa（三世勇健）
		mi gyo baḥi gnas rnam par gnon（不動勇健）
觀世音	觀自在	spyan ras gzigs dbaṅ phyug（觀世音）
大勢至	得大勢	mthu chen thob（大勢至）
香象	香象	spos kyi glaṅ po（香象）
香上	香悅	spos dgaḥ（香悅）
香上首	香悅吉祥	spos dgaḥi dpal（香悅吉祥）
首藏	吉祥藏	dpal gyi sñiṅ po（吉祥藏）
日藏		ñi maḥi sñiṅ po（日藏）
幢相	計都	tog（幢相）
大幢相	大幢	tog chen po（大幢相）
離垢幢	無垢幢	tog dri ma med pa（無垢幢）
無邊光	無上幢	rin chen mthaḥ yas dbyug gu（無邊寶杖）
放光	極解寶剎	rin chen dbyug gu ḥdor（捨寶杖）

離垢光	無垢寶刹	rin chen dri med dbyug gu（無垢寶杖）
喜王	歡喜王	mchog tu dgaḥ baḥi rgyal po（歡喜王）
常喜	常歡喜	rtag tu rab dgaḥ（常歡喜）
寶手		lag na rin po che（寶手）
虛空藏	虛空庫	nam mkhaḥi mdsod（虛空藏）
離憍慢		
	迷盧	ri bo（山岳）
	大迷盧	ri bo chen po（大須彌山）
須彌山	蘇迷盧	ri rab（須彌山）
光德王	功德寶光	yon tan rin chen snaṅ（功德寶光）
總持自在王	陀羅尼自在王	gzugs kyi dbaṅ phyug gi rgyal po（陀羅尼自在王）
總持	持地	sa rdsin（持地）
滅衆病		
療一切衆生病	除一切有情病	sems can thams cad kyi nad sel（除一切衆生病）
歡喜念	歡喜念	rab tu yid dgaḥ（歡喜意）
饜意	憂悲意	yid skyo（憂悲意）
常饜	無憂	skyo med（無憂）
普照	光藏	ḥod byed（發光）
*月明	栴檀	tsan dan（栴檀）
寶慧		
	於此無爭	
轉女身		gyo bzlog（轉女）
大雷音	無量雷音	dpag med mṅon bsgrags dbyaṅs（無量雷音）
導師	起菩提行	byaṅ chub kun nas bslaṅ（起菩提）
不虛見	不空見	mthoṅ ba don yod（不空見）
一切法自在	一切法自在	chos thams chad la dbaṅ bsgyur ba（一切法自在）
彌勒	慈氏	byaṅ chub sems dpaḥ sems dpaḥ chen po byams pa（彌勒菩薩摩訶薩）
文殊師利	曼珠室利童眞	ḥjam dpal gshon nur gyur pa（文殊師利）

* candana 栴檀を candra と誤解したか？

いるがこゝでは特に區別する爲に有命者と譯した。

⑪ lus can, skt. dehin 漢字譯には出ていない語で衆生と同意と見られるが，特に區別して有身者と譯す。

⑫ Snaṅ baḥi mtshan ma 顯現の相の意，新譯に從つて色相と譯す。

⑬ 北京版は「意に」を欠く。

⑭ こゝの文は煩惱身中に如來が藏されると云う本經の中心眼目であるが，これと同趣旨は華嚴經如來性起品にもあり，參考の爲に異譯諸本の相當個所を次に擧げる。

佛馱跋陀羅譯　華嚴經第三十五　寶王如來性起品。（大9. 624 a）

佛子，如來智慧，無相智慧，無礙智慧，具足在於衆生身中。但愚癡衆生顚倒想覆，不知不見不生信心。爾時如來，以無障礙淸淨天眼。觀察一切衆生。觀已作如是言。奇哉奇哉。云何如來具足智慧在身中而不知見。我當敎彼衆生覺悟聖道。悉令永離妄相顚倒垢縛。具見如來智慧在其身內與佛無異。

實叉難陀譯　華嚴經第五十一　如來出現品（大10. 272 c -273 a）

佛子如來智慧。亦復如是。無量無礙。普能利益一切衆生。具足在於衆生身中，但諸凡愚。妄想執著。不知不覺不得利益。爾時如來以無障礙淸淨智眼。普觀法界一切衆生。而作是言。奇哉奇哉。此諸衆生。云何具有如來智慧。愚癡迷惑不知不見。我當敎以聖道。令其永離妄想執著。自於身中。得見如來廣大智慧。與佛無異。

佛說如來興顯經第三（大10. 607 c）

若此仁者。如來至眞以無量慧。不可計明。悉入一切衆生江海心之所行。而普曉了群萌志操。如來之慧。不可限量。靡不周達。不可窮極。正覺之智。不可計會。觀察一切萌類境界。怪未曾有。斯衆生類。愚騃乃爾。不能分別如來聖慧。世尊普入。而自念曰。吾寧可宣顯示大道。使諸想縛。自然蠲除。如佛法身聖塗力勢。

以上を對照すると如來興顯經ではさほど明確ではないが，新舊華嚴經では，今の如來藏經と非常に似通つた思想であり且つ奇哉で始まる形迄似ている。兩者の間に何らかの關係がある樣である。尙，成立は遲れるが無上依經にもほゞ同じ文がある。

無上依經上　如來界品（大16. 470 a）

依無礙智於衆生相續中。觀如來界興奇異意。咄哉衆生。如來卽在衆生身內。如理不見如來。是故我說具分聖道。開解無始相結覆障。令諸衆生因聖道力破除相結。自能證見如理如來眞實平等。

又，佛眼，天眼等は後程に出ている佛智見と同義に理解されよう。兩者共に，煩惱を斷じて淸淨涅槃に住する如來のみが得られる智慧であつて，かゝる言い詮し方は初期佛敎にも見られる。卽ち律の大品に佛陀が成道後，梵天勸請によつて說法の決意をされ，世間を觀じ度すべき衆生を觀じ了つた時のことを次の樣に傳えている。

「世尊は佛眼を以て世間を洞察して，諸の衆生に塵垢の少い者，塵垢の多い者，利根の者，鈍根の者，善行の者，惡行の者，敎導し易い者，敎導し難い者，或は亦，他世の罪過の怖るべきを知つて住せる者を實見せられた。」

Addasa kho Bhagavā buddhaccakkunā lokaṁ volokento, satte apparajakkhe mahārajakkhe tikkhindriye mudindriye svākāre dvākāre suviññapaye duriññāpaye appekkacce paralokavajjabhayadassāvino viharante, (Mv. I .5. p. 6)

⑮ chos nid, skt. dharmatā 新譯は法藏と譯す。

⑯ Srid paḥi ḥgro pa, skt. bhava-gati 新譯は有趣見と譯す。

⑰ 如來藏九喩の中，第一未敷花内の如來の譬である。寶性論と佛性論には，この九喩を引用しているが，今は寶性論の梵文を E. Johnston 校訂本によつて示すと次の如くである。

kutsita-padma-koça-sadṛiçāḥ kleçāḥ/buddhavat tathāgata-dhātur iti/-
yathā vivarṇâmbuja-garbha-veṣṭitaṁ tathāgataṁ dīpta-sahasra-lakṣaṇam/
naraḥ samīksyâmala-divya-locano vimocayed ambuja-pattra-koçataḥ//99//
vilokya tadvat sugataḥ sva-dharmatām avīci-saṁstheṣv api buddha-cakṣuṣā/
vimocayaty āvaraṇād anāvṛito 'parānta-koṭi-sthitakaḥ kṛipātmakaḥ//100//
yadvat syād vijugupsitaṁ jala-ruhaṁ sammiñji taṁ divya-dṛik tad-garbha-sthitam abhyudīkṣya sugataṁ patrāṇi saṁchedayet/
rāga-dveṣa-malādi-koça-nivṛitaṁ saṁbuddha-garbhaṁ jagat-kāruṇyād avalokya tan nivaraṇaṁ nirhanti tadvan muniḥ//101// (pp.50-51)

諸の煩惱は萎んだ蓮瓣に似，如來性は佛の如くである。
恰かも色褪せた蓮瓣に包まれて
而も輝く千相を有する如來を，
無垢なる天的の眼を有する人が見出して，
蓮葉瓣から拔き出すであらう。//99//
丁度それと同じく，善逝は，佛眼を以て，
阿鼻地獄に居るものにも，自己の法性のあるを見て，
未來際までも續く無障なる
大悲を本性とする佛として，障から拔濟する。//100//
厭はしい，縮まつた蓮があるとせん。天的の見を有するものが恰かも，其瓣の中に存する
優良なものを見分けて，葉を破るであろう如く。
それと同じく，牟尼は貪と瞋との垢等の藏に覆はれた正覺佛藏を觀じて，
世間に對する大悲の故に，其覆ひを除滅する//101// (宇井譯)

更にこの譬喩は大乘法界無差別論にも引用せられている。
煩惱藏纏覆　不能益衆生　如蓮華未開（中略）
應知此如蓮未開。諸惡見葉共包裹故。（大，31.893. b）

⑱ de bshin gçegs paḥi gzugs, skt. tathāgata-rūpa
舊譯は如來身，新譯は佛眞實體と譯す。

⑲ yaṅ dag pa ñid du gnas so,
舊譯は，顯現佛性，新譯は得淸淨如來實體とす。尙，大正藏經に實禮とあるのは凡らく實體の誤植であろう。（大16.461 c）

⑳ chos rnams kyi chos ñid, skt. dharmānāṁ dharmatā
舊譯は諸佛法爾，新譯は法性法界と譯す。

㉑ 如來が世に出ずるも出でざるも云々の文は原始經典以來，緣起の法が常住不變なることを明かす場合に屢ゝ用いられている。例えば S. N. II. Jātipaccayā, 雜阿含經，法足蘊論，大毘婆沙論，順正理論，俱舍論，解深密經，入楞伽經，大乘密嚴經，金剛三昧經，大智度論，攝大乘論世親釋等がある。しかしこゝでは緣起法の代りに如來藏が常住なることを說いている。寶性論ではこの文を引用して如來藏と緣起の關

係を論じている卽ち

此法性法體性自性常住。 如來出世若不出世。 自性淸淨本來常住一切衆生有如來藏。此明何義。依法性依法體依法相應依法方便。（大31. 839. b）

梵本では

eṣā kula-putra dharmā ṇāṁ dharmatā /utpādād vā tathāgatānām anutpādād vā sadâivâte sattvās tathāgata-garbhā iti / yaîva câsau dharmatā saîvâtra yuktir yoga upāyaḥ paryāyaḥ/（E. Johnston 校訂本 p.73）

「善男子よ，これが諸法の法性である。諸の如來が出世しても，しなかつたとしてもこれら衆生は常に如來藏である」と。そしてこの法性といわれるものは，こゝでは道理（yukti），規則（yoga），方便（upāya），が同義語である。」

とあり，この如來藏と緣起については山口益博士著「般若思想史」pp. 86-87，高崎直道氏稿「如來藏と緣起一寶性論を手がかりとして一」（印度學敎學硏究Ⅱ-1. pp. 244～247）に詳しく論ぜられている。

世親の佛性論では，第四に解節經の中に說くが如しとして「佛告無盡意菩薩。善男子如來性者是眞實諦。若如來出世及不出世。性相常然，非虛妄法。」（大31. 812 a）とあり，如來性の常住で眞實なることを明かしている。この解節經とは現存漢字譯大藏經では眞諦譯の解節經一卷（大No.677）があり，佛性論に引用せられた經文に相當すると思われるのは「此法恒常。若佛出世若不出世。法性法界法住皆悉常住。」（大16. 714 b）がある。しかしこゝに登場する人物は須菩提であつて無盡意菩薩ではない。

㉒ 漢字譯は兩本共，次行と順序が代つている。その方が妥當と思われるので漢字譯の如く改める。

㉓ 第二巖樹中淳蜜の譬喩

寶性論梵文

kṣudra-prāṇaka-sadṛiçāḥ kleçāḥ/kṣaudravat tathāgata-dhātur iti/
yathā madhu prāṇi-gaṇôpagūḍhaṁ vilokya vidvān puruṣas tad-arthī/
samantataḥ prāṇi-gaṇasya tasmād upāyato 'pakramaṇaṁ prakuryāt//102//
sarva-jña-cakṣur viditaṁ maha-ṛṣir madhûpamaṁ dhātum imaṁ vilokya/
tad-āvṛitīnāṁ bhramarôpamānām açleṣam ātyantikam ādadhāti//103//
yadvat prāṇi-sahasra-koṭi-niyutair madhv āvṛitaṁ syān naro madhv-arthī vinihatya tān madhu-karān madhvā yathā-kāmataḥ/
kuryāt kāryam anāsravaṁ madhu-nibhaṁ jṇānaṁ tathā dehiṣu kleçāḥ kṣudra-nibhā jinaḥ puruṣavat tad ghātane kovidaḥ//104//（p.61）

諸の煩惱は小蟲に似，如來性は蜜の如くである。

恰かも蟲の群に覆藏せられた蜜を
そを求める有智の人が見出して，
從つて，方便して，蟲の群に，四方から
退散をなさすが如し。//102//
一切智の眼を有する大仙が知つた
蜜に譬へられるこの性を觀じて
蜂に譬へられる其覆ひに對し
絕對に相離れしめる//103//

恰かも千百億兆數の蟲によつて蜜が覆はれて居るとせん
蜜を求める人がそれ等の蜂を殺して，蜜を以て意の如くに
爲すべきことを爲すであらう如くに，
有身者の內に存する無漏の智慧は蜜の如く，
諸の煩惱は蜂に似，勝者はそれ等を殺すに巧である人の如くである。//104//

㉔ sans rgyas ñid, skt. .buddhatā

㉕ de bshin gçegs paḥi ye çes mthoṅ ba, skt. tathāgata-jñāna-darçana
舊譯は欠，新譯は佛智見とす。この佛智見は先に出て來た佛眼，天眼等と同義に理解さるべきである。

㉖ 貪以下十種の煩惱名を舊譯は欠く。前の四が根本煩惱で後の六が隨煩惱に當る。

㉗ srid pa gsum, skt. tri-bhava. 三界に同じ，卽ち欲界，色界，無色界のこと。

㉘ 第三皮糟中粳糧の譬喩
寶性論梵文
bahis-tuṣa-sadṛiçāḥ kleçāḥ/ antaḥ-sāravat tathāgata-dhātur iti/
dhānyeṣu sāraṁ tuṣa-saṁprayuktaṁ nṛiṇāṁ na yadvat paribhogamêti/
bhavanti ye 'nnādibhir arthinas tu te tat tuṣebhiyaḥ parimocayanti//105//
sattveṣv api kleça-malôpasṛiṣṭam evaṁ na tāvat kurute jinatvam/
saṁbuddha-kāryaṁ tṛi-bhave na yāvad vimucyate kleça-malôpasargāt//106//
yadvat kaṅguka-çāli-kodrava-yava-vrīhiṣv amuktaṁ tuṣāt sāraṁ khāḍya-susaṁs-kṛitaṁ na bhavati svādûpabhojyaṁ nṛiṇaṁ/
tadvat kleça-tuṣād aniḥsṛita-vapuḥ sattveṣu dharmêçvaro dharma-prīti-rasa-prado na bhavati kleça-kṣudhārte jane//107// (pp. 61-62)
諸の煩惱は外部の粃の如く，如來性は內部の米の實の如くである。
恰かも，穀物に於て粃と結合せる實は
人々の受用にはならないが，
然し，すべて食物等を求める人々ならんには，
それを粃から脫出せしめる如くに//105//
此の如く，衆生の內に於て煩惱垢に昧まされた
勝者たるものも，煩惱垢の驕惱から
離脫しない限りは，其間は三有に於て，
正覺佛としての所作を作すこと無がい。//106//
恰かも，稷，稻，芥子，麥，穀類の內にある實が未だ粃から，
脫去されず，稈があつて善く舂き淸められないものは，
人々の味よき食用にならない如く，
それと同じく煩惱といふ粃から未だ離れない身體を有し，
衆生の內にある法自在主も
煩惱といふ饑渴に苦しむ人々に，
法の喜びといふ味を與へるものとはならない//107//

㉙ raṅ byuṅ ñid,

㉚ この次に新譯では舊譯，藏譯共にない「若能悟解則成正覺，堅固安住自然之智」の文あり。

㉛ saṅs rgyas sa, skt. buddhabhūmi

㉜ 第四不淨處中の眞金の譬喩

寶性論梵文

açuci-saṁkāra-dhāna-sadṛiçāḥ kleçāḥ/suvarṇavat tathāgata-dhātur iti/
yathā suvarṇaṁ vrajato narasya cyutaṁ bhavet saṁkara-pūti-dhāne/
bahūni tad varṣa-çatāni tasmin tathâiva tiṣṭhed avināça-dharmi//108//
tad devatā divya-viçuddha-cakṣur vilokya tatra pravaden narasya/
suvarṇam asmin navam agra-ratnaṁ viçodhya ratnena kuruṣva kāryam//109//
dṛiṣṭvā muniḥ sattva-guṇaṁ tathâiva kleçeṣv amedhya-pratimeṣu magnam/
tat-kleça-paṅka-vyavadāna-hetor dharmâmbuvarṣaṁ vyasṛijat prajāsu//110//
yadvat saṁkara-pūti-dhāna-patitaṁ cāmīkaraṁ devatā dṛiṣṭvā dṛiçyatamaṁ
nṛiṇām upadiçet saṁçodhanârthaṁ malāt/
tadvat kleça-mahāçuci-prapatitaṁ saṁbuddha-ratnaṁ jinaḥ sattveṣu vyavaḷokya
dharmam adiçat tac-chuddhaye dihinām//111// (pp. 62-63)

諸の煩惱は不淨なる廁の如く，如來性は金の如くである。
譬へば，旅しつゝある人の金にして廁の中に
落ちたものありとせん。
その金は幾百年の間其のまゝに，
其性質を失はずに有して，その中に遺つて居る。//108//
それを，天的な純淨な眼を有する天人が，
觀て，そこに居る人に告げる。
この下にある清新な最上寶たる金を
清淨になして，寶としての爲すべきことを汝は爲せ，と。//109//
それと同じく，牟尼は糞に等しき
諸の煩惱の中に沈める衆生の功德を見て，
その煩惱の穢を清淨にする爲に
法水の雨を衆生の上に注いだ//110//
恰かも，廁の中に落ちた最も美はしい金を
天人が見て，そして垢から清淨にする爲に，人々に教へるが如く
之と同じく，煩惱といふ大不淨物の中に墮ちて居る正覺佛といふ寶を
勝者は衆生の內に於て觀て，
有身者にそれを清淨にする爲に，法を教へた//111//

この不淨處中の眞金の譬喩は，大乘法界無差別論にもある
「如金墮廁，在於覺觀糞穢中故。」(大31. 893 b)

㉝ glo bur ñoṅs moṅs (pa) デルゲ版は blo bur ñoṅs moṅs, skt. āgantuka-kleça
心性本淨客塵煩惱說を繼承している。

㉞ 第五貧家珍寶の譬喩

寶性論梵文

pṛithivī-tala-sadṛiçāḥ kleçāḥ/ratna-nidhānavat tathāgata-dhātur iti/
yathā daridrasya narasya veçmany antaḥ-pṛithivyāṁ nidhir akṣayaḥ syāt/
vidyān na câinaṁ sa naro na câsminn eṣo 'ham asmîti vaden nidhis tam
//112//
tadvan mano-'ntar-gatam apy acintyam akṣayya-dharmâmala-ratna-koçam/

abudhyamānânubhavaty ajasraṁ dāridrya-duḥkhaṁ bahudhā prajêyam//113//
yadvad ratna-nidhir daridra-bhavanâbhyantar-gataḥ syān naraṁ na brūyād aham asmi ratna-nidhir ity evaṁ na vidyān naraḥ/
tadvad dharma-nidhir mano-gṛiha-gataḥ sattvā daridrôpamās teṣām tat pratilambha-kāraṇam ṛiṣir loke samutpadyate//114// (p. 63)
諸の煩惱は地面に似，如來性は寶藏の如くである。
例へば貧しき人の家の內部に在つて
地の中に無盡の寶藏があるとせん。
彼人はそれを知らないであろうと共に，寶藏も，また，
こゝにこの私がいる，と彼に告げないであろう。//112//
それと同じく，此衆生は，意の內部に存する
不可思議で無盡の無垢法という寶の藏を
覺らないから，貧の苦を多く，永久に，享けているのである//113//
恰かも寶の藏が貧人の寶の內部に在るとせんに，其貧人に，
私は寶の藏である，とは告げず，其人もかくは知らないであらう。
それと同じく法の藏は意といふ家に在り，諸の衆生は貧人の如きものである
彼等に對して，大仙は，それを獲得せしめんが爲に，世に出現するのである。
//114//
この譬喩は，涅槃經卷八，如來性品の貧女人舍內眞金藏の譬と軌を一にする。
佛言，善男子，我者卽如來是藏義。一切衆生悉有佛性，卽是我義如是我義從本已來，常爲無量煩惱所覆，是故衆生不能得見，善男子，如貧女人舍內多有眞金之藏，家人大小無有知者，時有異人善知方便語貧女言。我今雇汝。汝可爲我耘除草穢。女卽答言。我今不能。汝若能示我子金藏。然後乃當速爲汝作。是人復言。我知方便能示汝子。女人答言。我家大小尙自不知。況汝能知。是人復言。我今審能。女人答言。我亦欲見幷可示我。是人卽於其家掘出金藏。女人見已心生歡喜。生奇特想示仰是人。善男子，衆生佛性亦復如是。一切衆生不能得見。如彼寶藏貧人不知。善男子，我今普示一切衆生所有佛性爲諸煩惱之所覆蔽。如彼貧人眞金藏不能得見。如來今日普示衆生諸覺寶藏。所謂佛性。一切**衆生**見是事已。心生歡喜歸仰如來。善方便者卽是如來。貧女人者卽是一切**無量衆生**。眞金藏者卽佛性也。
(大12. 648 b)

㉟ stobs, skt. bala.

㊱ ma ḥjiks pa, skt. vāiçāradya.

㊲ maḥhres pa, skt. āveṇika. 不雜の意。
新舊兩譯共力，無所畏はあるがこの不共はない。

㊳ bde gçegs lus, skt. sugata-kāya

㊴ 第六菴羅果內の實の譬喩
寶性論梵文
tvak-koça-sadṛiçāḥ kleçāh/bījâṅkuravat tathāgata-dhātur iti/
yathāmra-tārādi-phale drumāṇāṁ bījâṅkuraḥ san na vināça-dharmī/
uptaḥ pṛithivyām salilādi-yogāt kramād upaiti drumā-rāja-bhāvam//115//
sattveṣv avidyādi-phala-tvag-antaḥ-koçâvanaddhaḥ çubha-dharma-dhātuḥ/
upaiti tat-tat-kuçalaṁ pratītya krameṇa tadvan muni-rāja-bhāvam//116//

ambv-āditya-gabhasti-vāyu-pṛithivī-kāmâmbara-pratyayair yadvat tāla-phalâmra-koça-vivarād utpadyate pādapaḥ/
sattva-kleça-phala-tvag-antara-gataḥ saṁbuddha-bījâṅkuras tadvad vṛiddhim upaiti dharma-viṭapas tais taiḥ çubha-pratyayaiḥ//117// (pp.63～64)
諸の煩惱は皮の藏に似，如來性は，種子嫩芽の如くである。
恰かも，アームラ樹，ターラ樹等の果實の中に，樹の
種子と嫩芽とが其性質を減せずに有して居るから，
地中に蒔かれて，水等と結付くので，
漸次に樹王の狀態に至る。//115//
それと同じく，諸の衆生の中に於て，無明等の果皮の內にあつて，
莢に覆藏せられた淨法性が
それぞれの善根に緣つて漸次に
牟尼王の狀態に至るのである//116//
恰かも，水と太陽と日光と風と地と時と虛空との緣によつて，
ターラ樹の果實とアームラ樹の莢の口とから木が生ずるが如く，
その如く衆生の煩惱の果皮の內部に在る正覺佛の種子嫩芽が
法の若枝として，それぞれの淨緣によつて增長するに至る//117//

㊵ 膽部以下の諸果については舊譯は欠き唯菴羅果のみである。

㊶ 新譯は藤子とあるが藏譯より考えて凡らく籐子とあるべきでないか？

㊷ sems can とあつて譯としては衆生でよいが，こゝでは衆生所藏の如來藏を指しているのであるから衆生性とする。新譯は有性と譯している。

㊸ 新譯は有智とするが藏譯は無智である。新譯は所藏の智を指し，藏譯は能藏の智を指す。

㊹ 第七弊物中眞金像の譬喩
寶性論梵文
pūti-vastra-sadṛiçāḥ kleçāḥ/ratna-vigrahavat tathāgata-dhātur iti/
bimbaṁ yathā ratna-mayaṁ jinasya durgandha-pūty-ambara-saṁniruddham/
dṛiṣṭvôjjhitam vartmani devatāsya muktyai vaded adhva-gam etam artham //118//
nānā-vidha-kleça-manôpagūḍham asaṅga-cakṣuḥ sugatātma-bhāvam/
vilokya triyakṣv api tad-vimuktiṁ praty abhyupāyaṁ vidadhāti tadvat//119//
yadvad ratna-mayaṁ tathāgata-vapur durgandha-vastrāvṛitaṁ vartmany ujjitam
ekṣya divya-nayano muktyai nṛiṇām darçayet/
tadvat kleça-vipūti-vastra-nivṛitaṁ saṁsāra-vartmôjjhitaṁ tiryakṣu vyavalokya dhātum avadad dharmaṁ vimuktyai jinaḥ//120// (pp. 64-65)
諸の煩惱は汚衣の如く，如來性は寶像の如くである。
恰かも寶所成の勝者の像が
惡臭ある弊衣に掩はれて，それが
道の中に捨てられて居るのを，天人が見て，
それを解いて出す爲に，道行くものに，そのことを語るが如く//118//
その如く，種々なる種類の煩惱垢に隱されて，
畜生の中にすらある善逝の體を，無著眼の佛が觀て

それの解脱に對して
方便を與へるのである。//119//
例へば寶所成の如來の體が惡臭のある衣に包まれて
途上に捨てられて居るを，天眼者が見て，それを解く爲に諸人に示すが如く
それと同じく煩惱の爛衣に掩はれ，輪廻の道に捨てられて居るを
勝者が，畜生の中にても觀出して，性を解脱せしめる爲に，法を說いた//120//
この譬喩のアイデアは法華經所說の有名な無價寶珠の譬よりヒントを得たものに違いない。參考の爲に次に妙法華經の本文を揭げる。

妙法華經 4.（大9. 29. a）

譬如有人至親友家醉酒而臥，是時親友官事當行，以無價寶珠，繫其衣裏與之而去，其人醉臥都不覺知，起已遊行到於他國。爲衣食故，勤力求索甚大艱難。若少有所得，便以爲足。於後親友會遇見之。而作是言。咄哉丈夫。何爲衣食乃至如是。我昔欲令汝得安樂五欲自恣。於某年日月。以無價寶珠繫汝衣裏。今故現在。而汝不知。勤苦憂惱以求自污。甚爲癡也。汝今可以此寶貿易所須。常可如意無所乏短佛亦如是。爲菩薩時敎化我等。令發一切智心。而尋廢忘不知不覺。

正法華經 5（大9. 97 a－c）添品法華經 4（大9. 163 b－c）

一且如來藏經に取り擧げられると今度は楞伽經にも如來藏の譬喩として取り入れられて居り，經中に「如大價寶垢衣所纏」とあるのは，その素材が法華經にあることをよく示している樣である。今，楞伽經の經文を示すと次の如くである。

四卷楞伽經 2（大16. 489 a－b）

世尊修多羅說如來藏自性淸淨，轉三十二相入於一切衆生身中，如大價寶垢衣所纏。如來之藏常住不變。亦復如是。而陰界入垢衣所纏。貪欲恚癡不實妄想塵勞所污。一切諸諸佛之所演說。

十卷楞伽經 3（大16. 529 b）

七卷楞伽經 2（大16. 599 b）

㊺ de bshin gçegs paḥi ye çes mthoṅ ba, skt. tathāgata-jñāna-darçana

㊻ bde bar gçegs kyi gzugs, skt. sugata-rūpa

㊼ 第八貧女懷貴子の譬喩

寶性論梵文

āpanna-sattva-nārī-sadṛiçāḥ kleçāḥ/kalala-mahā-bhūta-gata-cakra-vartivat tathāgata-tadhātur iti/

nārī yathā kā-cid anātha-bhūtā vased anāthāvasathe virūpā/

garbheṇa rāja-çriyam udvahantī na sâvabudhyet nripam sva-kukṣau//121//

anātha-çālêva bhavôpapattir antarvatī strīvad açuddha-sattvāḥ/

tad-garbhavat teṣv amalaḥ sa dhātur bhavanti yasmin sati te sanāthāḥ//122//

yadvat strī malinâmbarāvṛita-tanur bībhatsa-rūpânvitā vinded duḥkham anātha-veçmani param garbhântara-sthe nṛipe/

tadvat kleça-vaçād açānta-manaso duḥkhālaya-sthā janāḥ san-nātheṣu ca satsv anātha-matayaḥ svātmântara-stheṣv api//123//（p. 65）

諸の煩惱は孕める女人の如く，如來性はカララの大種の中にある轉輪聖王の如くである。

例へば寡婦である醜き或女人が
貧賤な家に住すとせん
胎によつてけだかい帝王を娠みつゝも
彼女は自己の胎の中に居る王を覺知しないが如し，//121//
三有の生は貧賤な家の如く，未清淨な衆生は孕める女人の如く，
それ等衆生の中に存するかの無垢なる性はその胎兒の如くである
それがあるから，衆生は主を有するものである//122//
恰かも身は垢衣に掩はれ，醜き容貌を有する女人が
王の其胎の内に住するにも拘らず，貧賤な家に於て，最極の苦を經驗するが如く
それと同じく諸の衆生は煩惱の力で無寂靜の心となり，苦の家に住して，
そして自己の心の中に住する善き主があるにも拘らず，
主が無いといふ考になつている//123//
この貧女懷貴子の譬喩は古品大寶積經に出ている敎說を繼承したものであろう。
例えば大寶積經112，普明菩薩會（大11.634 b－c）
譬如刹利大王有大夫人。與貧賤通懷妊生子。於意云何是王子不。不也世尊如是迦葉。我聲聞衆亦復如是。雖爲同證以法性生。不名如來眞實佛子。迦葉。譬如刹利大王與使人通懷妊生子。雖出下姓得名王子。初發心菩薩亦復如是。雖未具足福德智慧。往來生死隨其力勢利益衆生。是名如來眞實佛子。
遺日摩尼寶經（大12.191 b－c）
摩訶衍寶嚴經（大12.197 a）
佛說大迦葉問大寶積正法經3（大12.209 a－c）
以上では刹帝利の王と賤女との間に生れた子は王子と呼ばれているが古代印度社會の習慣を規定しているマヌ法典（中野譯 p.285.X.9）及びヤーヂュニャヴルキャ法典（p.15, I 4-92）では王子とは呼ばれずに別のカーストたるウグラ族に屬するのである。

㊽ 毘舍遮，毘舍闍，畢舍遮，臂舍柘と音寫し，食血肉鬼，噉人精氣鬼等と譯される。梵語では piçāca，チベット語では，普通 ça za であるが，こゝでは ḥdre mo とある。
妙法華經第7，普賢菩薩勸發品（大9.61 a）には，夜叉，羅刹鳩槃茶，吉遮，富單那，韋陀羅と共に人を惱ます者として出ている。
その他，大智度論第54（大25.443 b）には「東方名提多羅吒。主乾闥婆及毘舍闍。」と云い，慧琳の一切經音義第18（大54.417 c）には，「畢舍遮鬼唐言食血肉鬼，羅刹之類也」としている。
密敎では，特によく出て來るもので例えば大日經第3，佛母孔雀明王經第1，灌頂經第8，虛空藏問七佛陀羅尼呪經。大佛頂陀羅尼等に說かれ，又胎藏界曼陀羅には餓鬼の如く瘦せ細り，髮をぼうぼうとさせて，手足或は劫波羅を持つて，いかにも美味なる如くに食つている圖がある。 この piçāca は佛敎のみならず古代印度で廣く恐れられていた鬼神の一種でマヌ法典（p.314 XI.96）には「(一切の）酒精飲料，肉，スラー酒及び煎汁はヤクシャ鬼，ラークシャナ鬼，ピシャーチャ鬼の食物である。天神に捧げられた供物（の殘饌）を食うブラーフマナ族は決してかゝる物を食してはならぬ」とある。

㊾ rigs, skt. gotra 舊譯は，「寶藏」と譬喩的に譯しているが新譯は「界」と譯してい

る。

(50) 漢字譯兩本共に「不久」とある。

(51) 第九眞金模像の譬喩

寶性論梵文

mṛit-panka-lepa-sadṛiçāḥ kleçāḥ/kanaka-bimbavat tathāgata-dhātur iti/
hemno yathāntaḥ-kvathitasya pūrṇaṁ bimbaṁ bahir mṛin-mayam ekaṣya çāntam/
antar-viçuddhyai kanakasya taj-jñaḥ saṁcodsyed āvaraṇaṁ bahirdhā//124//
prabhāsvaratvaṁ prakṛiter malānām āgantukatvaṁ ca sadāvalokya/
ratnākarâbhaṁ jagad-agra-bodhir viçodhayaty āvaraṇebhya evam//125//
yadvan nirmala-dīpta-kāñcana-mayaṁ bimbaṁ mṛid-antar-gataṁ syāc chāntaṁ tad avetya ratna-kuçalaḥ saṁcodayen mṛittikām/
tadvac chāntam avetya çuddha-kanaka-prakhyaṁ manaḥ sarva-vid dharmākhyāna-naya-prahāra-vidhitaḥ saṁcodayaty āvṛitim//126// (pp. 65-66)

諸の煩惱は泥埃の漆喰の如く，如來性は全像の如くである。
例へば內部は溶けた金で充たされ，
外部は泥より成り，已に冷却した像を見て，
それを知れる人が內部にある金を淸淨にする爲に，
外部にある蔽ひを取去るが如し。//124//
此の如く，自性の明淨性と諸の垢の
客塵性とを常に見て，
世間最上の菩提を有する人が，寶の出處の如きものをして
蔽ひから純淨ならしめる。//125//
例へば無垢であつて，輝ける金より成り，泥の內部にある像あるとせん。
寶の術に巧なる者が，その冷却せるを知つて泥土を取去るが如し。
それと同じく，一切知者は，淸淨なる金の如き意の已に寂靜となれるを知つて，
法を說く理趣による打擊法で蔽うて居るものを取除く。//126//

(52) こゝでは金剛の槌が如來の慧に喩えられ，それによつて煩惱を打ち碎くとされている。卽ち金剛＝慧と見ているのであるが，かゝる譬喩は能斷金剛般若經の經題に見られる。この金剛と般若の關係を大部分の中國釋經家は金剛の如き銳利な智慧で以つて堅固な煩惱を斷ずる意と解している。例えば，僧肇の金剛經註第1，吉藏の金剛經義疏第4，がそれであり，更に蒙古語譯も「聖金剛を以て斷ずるもの智の彼岸に到れりと名づく大乘經」（橋本，淸水編譯蒙古文金剛般若波羅密經 p.2, p.173）としている。金剛經以外でもこの樣に金剛を智慧の譬喩とする例はあつて，Ratnamālāvadana の Çālapuṣpāvadāna（採華供養佛得生天緣）には jñānavajreṇa satkāyadṛiṣṭiçailaṁ vibheda 金剛の慧を以つて石の如き有身見を粉碎すること（K. Takahata; Ratnamālāvadāna, p.73）とあり，又如來藏經には金剛慧菩薩と名付くる菩薩が登場して明らかに，金剛の如き慧と理解され，什譯維摩經，入不二法門第九にも金剛の慧なる語がある。しかし乍らこれとは反對に，金剛は堅固な煩惱の譬喩として解釋される說もあつて，その說をなす人に玄奘がある。大慈恩寺三藏法師傳第7に傳える玄奘の說とは次の如くである。「菩薩以分別爲煩惱。而分別之惑堅類金剛。唯此經所詮。無分別慧乃能除斷。」（大50. 259 a）松本文三郎博士は，この說に贊同

して居られ，（金剛經と六祖檀經の研究pp. 21-25）近年，伊藤唯眞氏はウテン文金剛般若經の歸敬文に，これと同じ理解がなされていることを指適された。（印度學佛教學研究第2卷，第2號，p. 207）卽ちその文は，biśä karma cchaiśa u āvaranä baśde garkhä vaśarä māñaṁdä nabuṣdä ttina Vajrrachedäka nāma 金剛に等しき全ての業と障礙とを斷ずる故に Vajracchedikā と名づく。（R. Hoernle; Manuscript Remains of Buddhist Literature found in Eastern Turkestan Vol. I. p. 239）以上の兩說共に肯き得るところであるが，どちらかと云えば後者は特殊な場合に限られる樣である。最初に意圖された考えは種々なる方面より檢討してやはり前者ではなかろうか。

(53) tshog bla dags, skt. adhivacana.

(54) 新譯により補う

(55) 大正藏經所收の新譯には十方とあるが，藏譯に stabs bcu とあるより見れば十力の誤りであろう。

(56) kha dog, skt. varṇa

(57) dran pa, skt. smṛiti

(58) 舊譯は五十功德旋陀羅尼とし新譯は五百功德轉陀羅尼とする。藏譯では yon tan lṅa brgya paḥi leḥu shes bya baḥi gzuṅs とあつて leḥu に旋の義があるのだろうか。藏譯には，旋或は轉の義は出ていない樣に考えられる。舊譯に言う旋陀羅尼は妙法華經第7普賢菩薩勸發品（大9. 61. b）に「受持讀誦法華經者得見我身甚大歡喜。轉復精進。以見我故。卽得三昧及陀羅尼。名爲旋陀羅尼。（dhāraṇyāvartā）百千萬億旋陀羅尼。法音方便陀羅尼。（sarvarutakauçalya）」と三陀羅尼の一つとして出ている。

(59) tiṅ ṅe ḥdsin, skt. samādhi

(60) sñoms par ḥjug pa, skt. samapatti

(61) 新譯は，法喜，禪悅とする。

(62) 未成佛の四菩薩について，國譯者は增一阿含經第44，舍利弗問經等に說かれる不泥洹の四大羅漢卽ち大迦葉，羅睺羅，賓頭盧，君徒般難の轉化ならんとしている。（國譯一切經，經集部 6. p. 98）恐らく，大乘的に轉化したものでこの法門を護持する爲に菩薩として殘されたのである。

(63) 藏譯原文は次の句と順序が逆であるが，意味上新譯に從つて入れ換える。

(64) 藏譯原文は次の句と逆であるが，意味上入れ換える。

(65) これより以下，次の偈頌に至る迄の長行の部分は舊譯に欠く。

(66) rnam par ḥdren, skt. vināyaka. 指導する人の意。